民主香川
定価　月100円
発行所
民主香川社
高松市藤塚町
３丁目13－14
☎(087)834-7311

本村伸子衆院議員招いて
4市で懇談会

日本共産党の本村伸子衆院議員は20・21日、香川県坂出、さぬき、丸亀、三豊の4市で開かれた「希望を語るワクワク懇談会」に参加し、入党を訴えました。白川よう子、浜川ゆりこ両四国比例候補も訴えました。

本村氏は、国民の運動で76年ぶりに保育士の配置基準が改善したことなどを紹介し、党の「東アジアの平和構築への提言」や経済再生プランを解説。「岸田政権は戦争をする国づくりや医療・介護・年金など社会保障改悪の方向に綱を引いています。日本共産党とともに、綱を国民の側に引っ張り返すためにあなたの力をおかしください。四国、香川で日本共産党の議席を伸ばしましょう」と呼びかけました。

四国中を駆け巡る浜川ゆりこ四国比例候補は20日、高松市の丸亀町町グリーンで街頭宣伝を行い、真ん中世代の集いに参加しました。

高松市内で街頭宣伝
浜川ゆり子四国比例候補

21日の本村伸子衆院議員を招いた懇談会には、浜川氏、石田まゆ衆院香川2区、笹井たかし同3区両候補も参加して演説をしました。

浜川ゆりこ四国比例候補は20日、高松市の丸亀町町グリーンで街頭宣伝を行い、真ん中世代の集いに参加しました。

21日の本村伸子衆院議員を招いた懇談会には、浜川氏、石田まゆ衆院香川2区、笹井たかし同3区両候補も参加して演説をしました。

白川氏は「自民党政治を変えてほしい」「裏金事件は許せない」という声と共に日本共産党への期待の声を紹介。「四国でも進む社会の高齢化や教育・介護分野での人員不足の実態がある一方で、岸田政権は教育や社会保障の予算を削り、人の命を大切にしない。この政治を必ず変えていく」とのべました。

4カ所で3人が入党しました。入党した女性は「日本共産党を信頼しています。なくてはならない党です」と語りました。

太鼓台

先月に続いて今回も石碑の紹介となります。『支那事変　武漢三鎮陥落記念』である。▼かつては地方銀行の支店もあり、賑やいだ商店街を一本裏に入った一画に小さな赤いお稲荷さんがある。社の前には、石の鳥居、2本の鳥居が建ち、石柱はこの社の入り口の左端に建っている。高さ2mほどの目につきやすい石柱である。右側面に発起人9人の氏名の刻名。左側には「昭和十三年十月二十七日（建てた日付と思われる）世話人12名の氏名。石の鳥居には「愛国」（左）「敬神」（右）の文字▼広辞苑、世界地図を見ると、『（武漢三鎮は中国の地名。鎮はまちの意。武昌、漢口、漢陽3市の総称。1949年に合併して武漢市。満州事変の柳条湖・北京から直線距離にして約千kmほど南へ下ったところにある。満州事変〈1931年〉から中国本土を南攻し9年後のことである。1938年10月28日、昭和天皇は武漢攻略の陸海軍部隊に『遂ニ衆敵ヲ撃崔シテ武漢後略ノ目的ヲ達成スルことに至レルハ深ク満足ニ思フ此の旨将兵ニ申シ伝ヘヨ』との「御言葉」を賜っている▼戦線は拡大、中国軍民の抵抗によって戦線は泥沼化、しかし日本国内では実情を知らされない国民は戦勝祝賀の旗行列、提灯行列をやり、新聞がそれを煽り立てるような状況のもとで、記念の石柱は、建てられてのでしょう。▼漢口の民家の壁には『兵隊は前線で血を流し財閥は銃後でお楽しみ』と、大きな落書きがあったようです。（も）

高松市が戦争遺品展

高松市の瓦町FLAG2F（瓦町駅改札前）で、高松市主催で戦争遺品展「武器なき戦士たち」が18日まで行われました。

非戦闘員が戦争にならないよう取り組んだ人形を交換する民間外交や、戦時下の金属回収とのたたかいを紹介。国家により総動員された女性、戦時食糧法のもと学校に女生徒ガイモを植える様子などのパネル、収蔵品など約60点を展示しました。

初日の12日は、日本共産党の樫昭二香川県議と岡田まなみ高松市議が参加しました。

樫氏は「高松空襲から79年がたち、戦争を知らない世代が大多数となった。もっと広く市民に知らせるため、10年前のように市役所内での展示に戻したい」とのべました。

夏真っ盛り！協同病院のひまわりが咲きました

これからの社会保障を考える
高齢化、人口減少、そして「大軍拡」の流れの中で ⑭
社会保障のあり方について考える会　準備会　藤井　明

前回は、「独占資本主義」の時代に成立した「社会保険」、そしてその背景にあった労働運動や社会主義の思想と運動の高揚、及びそれらに対する支配層の危機感等について触れました。社会保険はドイツ以外の国々へも広がって行きましたが、同じ頃、科学的な調査によって「社会問題」や「貧困」が「発見」された事もまたこの時代の特徴です。

3）独占資本主義段階……労働運動と社会主義思想の高揚、そして「社会保険」の成立した時代

3・ヨーロッパ諸国へ急速に普及していった社会保険

1888年にオーストリアとハンガリーで健康保険が成立、1891年にはノルウェーで、そして1901年にはスウェーデンでも労災保険が成立、その後もノルウェーの健康保険、フランスの老齢年金などが続き、社会保険を持つ国は次第にその数を増して行きます。イギリスでも、1909年に最低賃金制が敷かれ、1911年には健康保険と失業保険が成立しました。こうして、第1次世界大戦前には既に、医療保険7カ国、老齢保険11ヵ国、労災保険19ヵ国、失業保険3ヵ国と言うところまで到達していました。

※前回、ドイツでの疾病保険の成立が1888年となっていましたが正しくは1883年です。ご訂正をお願い致します

4・社会問題と貧困の発見

19世紀の後半には、労働運動や社会主義思想の高揚と並行して、社会民主主義の思想と運動にも新たな動きが生まれます。イギリス労働党の前身とも言われるフェビアン協会が設立されたのは、マルクス死去の翌年（1884年）の事で、高名なウェッブ夫妻やバーナード・ショーなども名を連ねたこの協会は、「社会意識に目覚めた中産階級知識人の知的サロン」的な限界はありつつも、社会改革を目指す勢力でもありました。また、開明的な資本家の中からも、改良によって社会の発展と安定を図ろうとする人たちが現れました。19世紀末から20世紀初頭にかけて社会調査を実施し、貧困の実態を解明したイギリスのチャールス・ブースやシーボーム・ラウントリーがその代表ですが、二人が活躍したのは、「イギリスにおける労働者階級の状態」の出版（1845年）から50年余り後のことです。

彼らは、知識階級であるとともに成功した資本家として財力にも恵まれていたため、私費を投入しての私的なものであったにも関わらず、調査は科学的且つ大規模で詳細なものでした。そしてその調査結果は、本人たちの予想したものだったかどうかは別として、貧困の原因は「労働」や「環境」といった社会的・経済的なものが中心であると言う事を客観的に明らかにしたのです。言葉を変えて言えば、貧困は個人的なもの（飲酒や怠惰）が主たる原因ではない（自己責任ではない）ことが科学的に示されたということです。これは、「貧困の発見」ともいわれ、労働者の要求や運動とはまた別の方向からですが、困窮者への対応が、「社会保険」から権利としての「社会保障」へと発展していく契機の一つとなりました。

なお、ブースやラウントリーの社会調査とその結果は、大正・昭和期のキリスト教社会運動家で生活協同組合にも関わった賀川豊彦や、1916年に評論「貧乏物語」を発表した川上肇にも大きな影響を与えました。